主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	堀内 ふみ野

主 論 文 題 名：

English Prepositions as an Interface between Embodied Cognition and Dynamic Usage: Proposal of a Dynamic View of Grammar

（認知と使用の接点としての前置詞：動的文法研究に向けた提案）

（内容の要旨）

本博士論文の目的は、文法的な構造が創発・定着する動機づけを、身体性と言語使用の両面から解明することである。認知言語学では、身体を介した経験が概念化の基盤となり、それが言語の意味拡張をはじめとした創造的側面を動機づけていると考えられている (Lakoff 1987; Langacker 1987, 2008)。一方で、認知言語学は使用基盤の考え方も重視し、語や構文に関する知識はそれが使用される文脈の情報を取り込みながら動的に決定されるという立場を取る (Langacker 2000; Bybee 2006)。身体的経験に基づく概念化と社会的な使用文脈の中で動的に形作られる慣習性は、どちらも認知言語学の理論的枠組みにおいて言語の構造を形作る重要な要素として考えられてきた。しかし両者は、「普遍性」と「慣習性」、さらには「個人の身体」と「対人的なコミュニケーション」という一見すると異質な要素を含むものである。本博士論文は、こうした二面性の接点として英語の前置詞を位置づけ、実例の観察に基づいてその意味分析に取り組むものである。それを通して、一見すると相反する要因が文法的体系の創発を複合的に動機づけ、我々の言語知識の形成に貢献していることを示す。以降、本論文を構成する全九章の概要を述べる。

第一章では、上で述べた本論文の問題意識を提示した上で、「なぜ英語前置詞を研究対象にするか」を、身体性、多義性、文脈依存性の観点から説明する。

第二章では、本研究の理論的枠組みとして、認知文法の言語観と用法基盤主義のアプローチについて説明する。その上で、認知言語学は理論的には用法基盤主義を掲げているものの、前置詞の意味に着目した実際の分析では必ずしも用法基盤的なアプローチが採られていなかった点を指摘する。

第三章では、認知言語学の枠組みで多数行われてきた前置詞研究に対して批判的検討を行う。従来の前置詞研究で暗黙に想定されてきたのは、その意味が前置詞一語を単位として記述可能であること、つまりは個々の「語」が意味を担う単位であるということである。この想定は、例えば Brugman (1981) や Lakoff (1987) が over の中心義を ‘ABOVE +ACROSS’ とし、そこから拡張した多様な意味を、相互に関連性をもった「over の意味ネットワーク」の形で示していることにも現れている。しかし、実際の言語使用に目を

向けると、個々の前置詞はより大きな談話的文脈や発話連鎖の中に生起し、その背景にはコミュニケーションを行う主体である話し手・聞き手が存在する。用法基盤主義の立場に立脚するならば、前置詞に関する知識は生起文脈に関する情報と併せて蓄積され、その意味は「語」よりも大きな単位で認識されている可能性がある。しかし、先行研究では前置詞の意味が「語」の単位で分析され、動的な使用文脈と前置詞の意味との関わりは詳細には論じられてこなかった。第三章では、具体例を提示しながら先行研究の問題点を述べ、語と生起文脈との関係を重視した、動的な文法研究の必要性を提案する。

第四章から第七章にかけては、コーパス調査に基づく四つの事例研究の結果を提示し、認知プロセスのみならず、共起語との関係、談話の構造、ジャンルの特性、コミュニケーションの目的といった多様な文脈的要因が、前置詞の振る舞いを複合的に動機づけていることを論じる。それを基に、従来の「語」を基本単位とした意味分析の在り方に疑問を投げかける。

第四章では、最初の事例研究として、類義的な表現 influence on と influence over の比較を行っている。コーパスを用いて両者の用法を比較し、「影響を与えるもの」の有生性によって二つの表現が使い分けられていることを定量的に示す。それを基に、両者の使い分けの一部は on と over の空間義の相違と対応していることを論じる。これは、従来の研究で指摘されていたように、身体的経験に結びついた空間義の特性が前置詞の抽象義の特性を動機づけている側面があることを示すものである。一方で、これら二つの表現は生起しやすい文法的なパターンが異なるなど、構成要素である on/over の空間義だけには帰せない相違も見られる。こうした観察結果から、言語使用者は構成要素の意味だけではなく influence on と influence over それぞれの表現が含まれるより大きな構文に関する知識も有しており、それに基づいて両者を使い分けていることが示唆される。

第五章では、前置詞 under を主要部とした句（under 句）の文法的特性を、その反義語 over を主要部とした句（over 句）や、類義語 below を主要部とした句（below 句）との比較から明らかにする。まず、コーパス調査の結果から、これらのうち under 句だけが文副詞的に用いられ主節前に生起する傾向にあること、その場合に under 句は事態が起こる条件を表すことを示す。under 句が文副詞的に生起する傾向は under 句が空間義を表すときには見られないものであることから、under が条件を表す意味に拡張したことによって生じた文法的特性であると考えられる。さらに、under 句と if 節の意味機能の類似性を指摘した上で、if 節の振る舞いからの類推により、under 句にも、条件を表す場合に特有の文法的振る舞いが定着した可能性を指摘する。

第六章では、above/below の談話指示用法（e.g., as mentioned <u>above</u>, see <u>below</u>）を比較し、一見すると対称的な意味を表す両者に、非対称的な振る舞いが見られることを指摘

する。例えば、両者は生起しやすい文法的なパターンが異なり、また、共起しやすい名詞・動詞のタイプも異なる。これを踏まえて、本章では、above/below に非対称性が生じる動機づけを談話の構造から考察する。具体的には、談話における先行文脈と後続文脈は読み手・書き手にとって異なる意味を有しており、書き手はその相違に配慮しながらテクストを構成することによって、above/below の間に非対称性が生じていることを提案する。本章では、この事例から、書き言葉の構造や読み手・書き手間のコミュニケーションの性質、ジャンルの特性といった要因により、前置詞の振る舞いが形作られる側面があることを示す。

第七章では、子どもによる前置詞の使用の特性を、Du Bois (2001, 2014) の対話統語論 (dialogic syntax) の枠組みを用いて分析する。親子の会話における発話連鎖に着目し、子どもによる前置詞の産出の仕方が月齢に応じてどう変化するかを辿ることで、前置詞（および、前置詞を含む構文）の習得プロセスを探る。発話の連鎖関係を見る上では、先行発話とあらゆる面で類似した発話を後続話者が行う「響鳴」 (resonance) に焦点を当て、響鳴が起こる頻度やその範囲を月齢ごとに観察する。その結果として、(i) 子どもは先行発話への響鳴を介して前置詞を使い始め、月齢が進むにつれて徐々に響鳴による産出の割合が低下すること、(ii) 月齢が進むにつれて響鳴の範囲が拡大していくこと、(iii) その拡大には親からの響鳴が重要な役割を担うことなどを明らかにする。この事例研究を通して、前置詞に関する知識の習得が、先行発話の性質といった局所的文脈に大きく依存して起こっていることを示す。それと同時に、子どもはコミュニケーションの目的をもって前置詞を使い始め、コミュニケーション上の機能に依存して前置詞の用法を習得する傾向があることを論じ、インタラクションの動的性質を重視した文法研究の有効性を示す。

第八章では、以上の事例研究を踏まえて理論的考察を行い、主に次の二点を指摘する。第一に、前置詞の意味拡張は普遍的な認知プロセスに基づいて起こっていたとしても、実際の使用における各前置詞の振る舞い（生起する構文、生起位置、共起語の性質など）は、意味拡張が起こったあとの抽象義の意味的・機能的特性、それが使われる談話の構造、コミュニケーションの目的といった文脈的要因から形作られる。本研究で示した事例は、前置詞に関する話者の知識、およびそれを含む文法的パターンを形作る重要な基盤として、普遍的な認知的能力のみならず、動的かつ局所的な使用文脈の特性を考慮するアプローチの妥当性を示している。第二に、私たちは特定のコミュニケーション環境に埋め込まれた形で「語」の意味を認識・蓄積していると考えられる。従来の前置詞分析では、前置詞一語を単位として、意味の記述・分析が行われる傾向にあった。しかし、

実例において「語」は必ずしも意味を伝達する基本的な単位ではなく、また、語の意味は様々な用法を集約した抽象的なスキーマとして記述できるものでもないと考えられる。言語使用者の「語」に関する知識は、その語が含まれるより大きな構文や使用文脈に埋め込まれた形で記憶・アクセスされるものであり、また、語に慣習的に結びついた振る舞いや生起しやすい構文は、実際の使用文脈に大いに依存する形で動的に形成され、定着していると考えられる。

さらに、第八章では、本論文の方法論的な意義も述べている。本論文では、コーパスから採取した実例をコーディングし、必要に応じて統計的手法も使いながら、言語使用の傾向を定量的に示している。例えば第七章では、定量化しにくいと言われてきた話し言葉の特性や発話間の関係性を「響鳴率」に基づいて示している。このように、「文脈的特性」や「談話の性質」を客観的に示す具体的な方法を提示したことは、文脈的要因を重視した動的な文法研究を推進する上で重要な意義を持つと思われる。

第九章では、本論文の内容をまとめ、今後の展望を述べている。以上で見てきたとおり、従来の前置詞研究では、その意味が拡張する認知的基盤に焦点が当てられてきた。また、その意味分析は前置詞一語を単位として行われる傾向にあった。それに対して本博士論文は、前置詞の振る舞いが認知的要因だけではなく、動的な使用文脈やコミュニケーションの目的といった複合的要因によって動機づけられていることを示している。前置詞をはじめとした「語」の意味とは、その語のあらゆる用法を抽象化したスキーマとして単一的に記述できるものではなく、具体的な使用事例に基づき、局所的な生起文脈の情報と共に蓄積・アクセスされうるものであると考えられる。今後は、前置詞以外の品詞にも研究対象を広げつつ、より多様な文脈的要素（例：視線などの非言語的要素、話し手・聞き手の対人関係）を考察対象とすることで、生起文脈の特性を文法的構造が創発する中心的基盤として位置づける「動的文法研究」をさらに発展させることが可能になるであろう。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	FUMINO HORIUCHI

Title of Thesis:

English Prepositions as an Interface between Embodied Cognition and Dynamic Usage: Proposal of a Dynamic View of Grammar（認知と使用の接点としての前置詞：動的文法研究に向けた提案）

Summary of Thesis:

This thesis proposed a dynamic view of grammar by examining the behavior of English prepositions in discourse contexts. While the meanings of prepositions have been studied in the field of cognitive linguistics from its inception (e.g., Brugman 1981; Lakoff 1987; Dewell 1994; Tyler and Evans 2001, 2003), these studies have mainly attempted to uncover the cognitive motivation(s) for their semantic extension based on structured examples, i.e., based on sentences created by the researchers. These studies seem to assume that the senses of a given 'word' can be defined, and that the 'word' is the basic unit of meaning. This assumption is reflected in their attempts to describe the meanings of individual prepositions (e.g., in describing the prototypical sense of *over* as 'ABOVE + ACROSS') and their semantic networks, without examining contextual or discourse factors in detail. However, when actual language use is taken into account, the meanings of an individual preposition can differ depending on its co-occurring words; furthermore, its grammatical behavior is determined based on the environment in which it occurs. However, the relationship between words and their co-occurring environments has not been examined in previous studies on prepositions.

In light of this situation, this thesis analyzed the natural use of prepositions embedded in discourse contexts, showing how dynamic factors in natural discourse can interact with cognitive processes in determining the behavior of each preposition. This thesis includes four case studies using data extracted from corpora – some data are extracted from the genre of formal written text, others from conversational data between children and their parents.

Based on the case studies, this thesis quantitatively demonstrated that (i) the meanings of linguistic expressions tend not to be conveyed by the 'word' unit but rather by larger constructions embedded in specific communication environments, (ii) our linguistic knowledge is not necessarily stored in 'word' units, and (iii) the behavior of individual words is determined and heavily conventionalized depending on their naturally occuring contexts. Through examining the meaning of the 'word' unit based on natural language data, this thesis suggested that not only cognitive but also contextual factors play an important role in the usage of prepositions (or of constructional patterns including prepositions) and in organizing our knowledge of prepositions.